部活動に参加できるよう取り組む必要性を痛感したところです。

総会終了後は、昨年同様、会場を変えて出席者全員によるランチ会を開催しました。

会では、食事を楽しみながら、日頃思うように

佐賀県支部

令和6年5月25日(土)午後4時から、伊万里市の「いけす割烹山平」で、佐賀県支部総会を開催しました。会員の高齢化は否めず出席の有無を心配しましたが、昨年より1名多い12名の出席者がありました。

総会は(1)開会の辞、(2)校歌斉唱、(3)物故者への黙祷、(4)支部長挨拶のあと、議案の審議に入りました。

【議案】

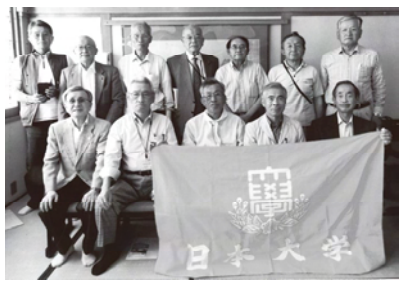
①令和5年度事業経過報告及び決算報告

令和5年度の事業は、コロナ禍で自粛していた事業のほとんどを再開し実施。特に、恒例のゴルフ大会を再開し、楽しい一日を過ごしました。

②会計監査報告

③役員改選について

④令和6年度事業計画(案)及び予算(案)について



質疑応答後、議案はすべて承認されました。「その他」の項目の中で、支部長から、令和6年5月18日、東京で開催された通信教育部校友会定期総会の報告がありました。その中で、「通信教育部校友会報」は年2回から1回に削減され、更にこれに伴い、これまで各県の校友会支部が発送していた会報は本部発送に変更されるとの話がありました。当県の場合、これまでは会報発送作業時に役員会を開催、会員の安否確認、校友会事業の打ち合わせや方針等、校友の団結の場としていたこと、会報と併せ、校友会の会費納入等会員へのお願いや事業報告をしていたことに意義を感じていた。しかし、今回の本部からの発送方法の転換は、会員間の繋がりや校友会の弱体化への懸念についての意見が多くの会員から出されました。

このことは、佐賀県支部にとって今年度の重要な課題となりました。

総会終了後、記念の写真撮影をし、懇親会をしました。久しぶりの懇親会とあって、話も弾み楽しく友好を温めた時間でした。

（文責：太田 勝一）

できない情報交換や近況報告などを通じ、交流を深めました。

最後に、例年年明けに行っている役員会への集合を期して散会しました。

（文責：久野 幸雄）

四方八方ドイツ フード&ドリンク前編

村上まゆみ

私はドイツに通い始めて35年以上になります。個人旅行と仕事(添乗)ですが、何時もドイツ人の体格の良さには感心しました。2008年に公表された第2回ドイツ国民栄養調査によると、身体測定の結果成人男性(6117名)の66%と成人女性(7090名)の51%が過体重・前肥満または肥満でした。ドイツ食は日本食に比べて、脂質と蛋白質の比率が高くエネルギー摂取量が多いのです。

2023年3月個人旅行した時街の人々を見て感じたのは、ビール腹で膨よかな体型の人を殆ど見掛けなくなった事と、エスニック系の住人の存在でした。コロナ禍の影響よりもダイエットを試みる人が多くなったと思います。また生活習慣病の予防・動物愛護・地球環境への影響等の理由から菜食主義者も増えています。2019年ドイツでは約800万人がベジタリアンで約130万人がビーガンです。彼等向けの商品を売る店やレストランもあります。寿司やお握りの販売店も増え軽さを志向する食の変化を感じました。

では具体的にどのような食事なのでしょうか。まず私が体験したパッケージ旅行の食事について話します。家庭外で取る外食ですが伝統料理が組まれていました。

朝食にはプレートフェンという小麦粉で作る丸形白パンが出ます。このパンはドイツ中で見掛けますが都市によって呼称が違います。通常横からナイフを入れてハム・チーズ等を挟んで食べます。

黒パンはライ麦と小麦少々で作りますが、ザイアータイクという酵母が入り酸味があるパンも好まれています。ホテルの朝食はビュッフェ式が殆どです。バジェット次第で品数が増え質も良くなりますが、ドイツ色は薄れます。

昼と夜は3コースのセットメニューをローカルレストラン或いはホテルレストランで食べました。

スターターはスープが多く、クレープ入りコンソメスープと肝臓団子スープ等を飲みました。ポピュラーなメインディッシュはビールに良く合うソーセージと、赤ワインと酢に漬け煮込む肉料理のザウアーブラーテンです。付け合わせはキャベツの塩漬けザウアークラウトとジャガ芋料理が一般的です。その他、万人向きのコール・ルーラーデ(ロールキャベツ)とマウル・タッシェン(イタリアのラビオリ風)。魚は鱒・鱸・鮃などの料理を食べました。人気のデザートはアップルがたっぷり入ったパイで、自家製は温めても冷やしても美味でした。郷土料理とはいえ、食材や料理法は近隣の地方や国にも似たものがあるようです。

ドイツには主食は無くパン・ジャガ芋・乳製品・肉が基礎的食品です。しかし日本人が米離れするようにドイツ人のジャガ芋離れが進んでいます。最近の世界国別年間一人当たりジャガ芋消費量は10位前後です。

次に個人旅行中の食事について少し話します。レストランやカフェテリアで食べる時は、サラダかスープの一品とパンで充分でした。オーダーする際は一品の量に注意が必要です。その他ハンバーガー・ピザ等ファーストフードを食べました。ドイツではインビスと称し、ドイツ発祥のソーセージサンドとカリーヴルストを始め、トルコ人移民が広めた肉と野菜たっぷりのケバブサンドをドイツ中で見掛けました。

ドイツでは移民の背景を持つ人々(ドイツ国籍を持つ者と外国籍保持者)が増加しています。連邦統計局の2017年の統計によると、全人口の約23・3%に達します。

移民の背景を持つ人々の出身国は主にトルコ・ポーランド・シリア等です。このようなエスニックグループとの交流は、当然ドイツ人に影響を与えます。ドイツの食文化はその長い波瀾万丈の歴史において幾つかの主要な変遷を経て来ました。

中世末期・近世のドイツは中小の領邦国家が林立し食文化にも地域的特徴を残しています。又、大局的に見ればアルプス以北のゲルマン的狩猟・牧畜文化は地中海的農耕文化の影響を受けました。16世紀には東方から胡椒等の香辛料と、新大陸からジャガ芋・トマト・トウモロコシ等が渡来し改良されて来ました。そして19世紀になると工業分野の発明(冷蔵・冷凍庫、濾過機、加工食品等)のお陰で、食品の輸送と加工・保存技術が大きく改善され食の国際化が進みました。しかし20世紀初めの大戦に敗北。戦後は過酷な状況下に置かれ食料配給制度によって生き延びたのです。20世紀の後半になり政治・経済が安定すると、食料事情も改善され国民の栄養について考える余裕が生まれました。

【続】

韓国の博物館を巡って

奈良県支部　立花初代

我が国には国立博物館が東京・京都・奈良・九州と4ヵ所あるが、韓国には現在14の国立博物館がある。今回はフェリーで往復2泊、釜山で2泊、4泊5日の旅で4ケ所の博物館を訪れ、日本の古墳時代と重なりあう新羅・百済・伽耶の三国時代の古墳や遺跡からの出土品から昔の韓国の都城形状を確認する旅です。

さらに南部の加羅地域に訪れ、出土品から技術の交流と倭国との繋がりを学び、特に、珍しい武寧王陵の埋葬施設を見て日本の墳墓の違いなどを比較したい。

国立中央博物館と公州博物館

まず初日は韓国最大の規模を誇るソウルの国立中央博物館を訪れた。四角い形をしている韓国の南東の端の釜山から北西の端ソウルまで斜めの線上を韓国の新幹線KTXで約2時間40分の旅であった。ソウルは1395年李氏朝鮮王朝の中心地でもあった。博物館の敷地面積は9万3千坪、世界でも6番目に大きい博物館である。

収蔵品は約30万点、常時1万2千点を展示していた。新羅・百済・伽耶の寺院や古墳からの遺物で埋めつくされている。日本でも馴染み深いのは二体の国宝の「半跏思惟像」である。京都広隆寺にある半跏思惟像と類似していると言われる。右手を左足にのせ口元には謎の微笑みを浮かべ思索にふけっている仕草が観客を魅了するあの仏像である。時を超えて国をこえて世界中の人々が共有しているという空間が心地よい。改めて博物館の偉大さを感じ取った。博物館の入口から見えるのは「敬天寺十層石塔」が高い天井を抜けんばかりに堂々と鎮座していた。この石塔は大理石製で仏陀、菩薩、草花の文様が四方に見事な技法で彫られていた。他にも高句麗古墳群の江西大墓の玄武、明治大正期に活躍した大谷探検隊の中央アジアコレクション等がある。

敬天寺十層石塔

2時間の滞在のあと、龍山駅から公州に向かう。公州は百済が紀元前18年に建国されて660年滅びる間、475年から63年間首都であった熊津(ウンジン)時代の首都であった。百済の文周王がソウルの漢城から遷都した場所でもあり、都城制が色濃く残っている。都城制とは王の住まいと官人や民衆の住まいが壁で囲まれて都として機能する制度である。城壁が残る公山城は、稜線に石積みが続き眼下に錦江がくねくねと雄大に流れていた。2015年に百済歴史地区としてユネスコ世界文化遺産に登録され毎年10月には百済祭りが盛大に催行されるそうだ。

国立公州博物館は公山城の直ぐ側にあり、収蔵品が約1万点あり、国宝19点がある。一番の目玉は百済第25代武寧王が523年に亡くなった王陵埋蔵施設と王陵からの出土品である。私の今回の旅行の目的でもあり楽しみでもある。

特別に武寧王陵室があり、金製の冠飾・耳飾り、ヒスイの勾玉、王陵の入り口で発掘された鎮墓獣像(国宝)などが展示されていた。この石の鎮墓獣がころころして可愛い、きっと武寧王を入口で守っていたに違いない。中でも王が頭につけていた金の王冠、蔦草模様と炎が上に登るような金と小さな薄い金の板百28個が金の糸で結ばれた金製冠飾は圧巻であった。

金製冠飾

扶余博物館と武寧王陵

2日目は扶余博物館をたっぷりと満喫しようと思い、扶余に公州の武寧王陵を加えた。扶余は唐と新羅によって滅ぼされるまで百済の3番目の首都であった泗比(シビ)である。日本に仏教文化を伝えた地でもある事から日本にとって馴染み深い地である。論山からバスで40分、バス停から歩いて10分かかった。国立扶余博物館は多数の勾玉、陶器や仏教関連の彫刻等2万5千点の遺物を所蔵し、国宝の「百済金剛大香炉」のその神々しさに感動した。台座の龍がハスの蕾をくわえ立ち上がっている様、胴体の美しい植物の彫刻が見事である。頭には鳳凰がとまっている。鳳凰の彫刻は仏教芸術の傑作といえる。大香炉の前にいると作者の技術に脱帽です。

百済金剛大香炉

扶余にも城都制がくっきりと残っている。都を囲むように石積の防御施設の扶蘇羅城があり、麓には白馬江が流れ、扶余羅城の外には王族の陵があるというように都と城があり外に御陵をおくという制度がくっきりとみえる。百済が滅びる時に3千人の宮女が身を投げたという落花岩や羅城の外側には百済王室の墓地がある。

再びバスで、昨日見損なった武寧王陵に行くことにした。武寧王陵は盗掘されずに発掘された唯一の古墳である。14点の国宝があり、記念館に入ると、まず武寧王の立像に圧倒された。墓の内部に入ると専築(粘土を焼いて作ったレンガ)のレ

（次頁に続く）